HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	八木光則・松本建速発表に対するコメント : 考古学の立場から
Author(s)	瀬川, 拓郎
Citation	130-135 新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56286
Type	report
File Information	pt2ch6.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第 6 章 八木光則・松本建速発表に対するコメント：考古学の立場から

瀬川　拓郎

八木光則先生、松本建速先生のお二方からは、移住の問題について東北北部の視点からお話をいただきました。私の方からは、この移住の問題を北海道からみた場合どのようなことが考えられるのか申し上げ、明日の議論につなげたいと思います。

古代北海道への移住の問題とアイヌの人びととの関係を考えるとき重要な論文は、もう 40 年以上前になりますが、石附喜三男先生が書かれた「アイヌ文化における古代日本的要素伝播の時期に関する一私見」（1967『古代文化』19-5）になると思います。

この中で石附先生は、近世のアイヌ文化にみられる小刀のマキリは、正倉院所蔵資料や古墳文化にみられるものと同形式で古代的なものだとされました。また、紡錘車と呼ばれる糸つむぎの道具や機織り技術が、続縄文時代ではみられませんけれども擦文文化には入っている。さらに、近世のアイヌが用いていた雑穀の穂摘具があって、これはカワシンジュガイや鉄で作っていますが、弥生時代の石包丁とよく似ている。近世のアイヌが用いていた脱穀用の竪杵、高床式の穀倉なども非常に古い日本的な要素である。

このような例を挙げて石附先生は、アイヌ文化には古代日本的な文化要素が色濃く残存しており、それが入ってきたのは擦文文化成立の段階だろうと指摘されました。これは擦文文化成立の問題、あるいは本州の文化がアイヌの文化におよぼした影響ということを考えるとき、やはり重要な問題だろうと思います。

つまり石附先生は、擦文文化は古代日本の農耕民の文化を個々の文化要素として受容したのではなく、コンプレックスとして、まるごと文化複合として受容したのだと考えた。石附先生がお亡くなりになったあとですが、千歳市の祝梅三角山 D 遺跡や丸子山遺跡で調査がおこなわれて、土製の勾玉や丸玉をばらまいたあとがみつかりました。土製勾玉や丸玉を住居でばらまくのは、本州では祭祀的な行為とされているものです。つまり擦文文化の成立にあたっては、農耕の技術的なシステムだけでなく、祭祀といった精神文化までも本州から受容したということがわかってきました。

このような古代日本文化そのものともいえるコンプレックスの受容は、擦文文化の成立にあたって「日本」ときわめて濃密な交流があったことを示しています。さらに、古代日本的な要素がアイヌ文化のなかに近世まで残存してきた事実は、これほど濃密な「日本」との交流が、その後のアイヌの歴史にはほとんど存在しなかったということも物語っています。

言語学の中川裕先生は、アイヌ語における日本語からの借用は、日本における漢語の借用や英語におけるフランス語の借用の割合に比べるときわめて少ない、したがって日本とアイヌの文化交流はかなり限られた時期におこなわれたのではないかと指摘されておられますが、これはきわめて示唆的です。

アイヌ語における日本からの借用語彙は、儀礼や祭祀のジャンルにかかわるものが多いのですが、この儀礼・祭祀関連語彙の多くは奈良・平安時代の古代日本語です。石附先生がいわれたように、アイヌのなかには古代日本的な要素が色濃く残っており、それはおそらく擦文文化成立前後という限られた時期に入ってきたものであるといえそうです。

では、このような文化複合の受容は、アイヌの祖先である擦文時代の人びとが本州からやってきた農耕民に同化してしまった、あるいは本州の農耕民に従属してしまったことを意味しているのでしょうか。

おそらくそうではありません。擦文文化の成立とは、アイヌが従来の狩猟にくわえて農耕を導入し、「農耕する狩猟民」として新しい社会に踏み出すことになった事態を意味しています。古代のアイヌにとって、農耕の導入はかなり大きな社会変革だったと思います。そのような新たな社会に踏み出すにあたって、新しいイデオロギーをつくり出す必要があった。従来の狩猟民のイデオロギーに農耕民のイデオロギーを取りこむ必要があった。それこそが、古代日本の文化複合を受容した理由ではなかったでしょうか。

東北北部から北海道への移住について、八木先生は否定的なお立場だと思っていましたが、そうではないことが今日のご発表で理解できました。八木先生は、東北北部からの移住はあっただろうが、規模的に北海道の住人を凌駕するようなものではなかった、北海道の住人の在地伝統は同化されることなく、その後も受け継がれていったとお考えなのであって、それは私も同感です。在地伝統の継承という事実からすれば、アイヌ集団を取りこんでしまうような規模の移住はなかったと私も思います。

ただ、東北北部からの移住が在地集団を凌駕したり同化してしまう規模ではなかったにせよ、移住集団は祭祀・儀礼・言語といった精神文化にまで大きな影響を及ぼしたという点を見逃してはならないと思います。その結果成立した「農耕する狩猟民」の文化である擦文文化は、その後のアイヌ文化にまで大きな影を落としています。この古代の激動といいますか、インパクトの実態を明らかにしなければ、アイヌ文化の成り立ちは語れないのではないか。在地伝統の重視は正しい視点だと思いますが、それが移住集団の影響を軽く見積もることになるとすれば、それはちがうといわざるをえません。

移住の実態については明らかではありませんが、私自身は本州から北海道への移住の契機として阿倍比羅夫の遠征が大きくかかわっていたのではないかと最近考えています。この点について少し説明させていただきたいと思います。

古墳時代が始まる３～４世紀、東北北部には北海道から続縄文人が南下します。八木先生はそうではなく、縄文時代以来東北北部に住んでいた人びとが、古墳時代になると稲作農耕をやめて北海道の続縄文文化を取り入れたというお立場だと思いますが、私自身は、東北北部の続縄文文化を担ったのは北海道から南下した続縄文人だったと考えています。続縄文人が東北北部に南下したのは、おそらく古墳社会との交易、それも鉄製品の交易が目的だったと思います。

しかし、６世紀には南下していた続縄文人が東北北部から北海道に撤退する。では、この撤退のなかで本州との交流が断たれたのかといえば、そうではない。事態はまったく逆で、６～７世紀の恵庭市西島松５遺跡の続縄文人の墓からは、すさまじい量の鉄製品が出土しています。続縄文人が６世紀に東北北部から撤退しても、日本との交流・交易は拡大していきます。これ

はどういうことなのか。

北海道から出土している５～６世紀代の須恵器をお手元の資料に集成しました。これを多いとみるか少ないとみるか、意見は分かれるかもしれませんが、多数の古墳集団が北海道に入りこんでいたとはいえそうもない。つまり、５～６世紀代に本州から北海道に渡ってきた人間は、おそらく多少はいたけれども、そうした人間が北海道に大量の鉄製品をもたらして、拡大していく交流・交易を支えていたとは考えにくい。

そうではなく、６世紀前後には東北北部の八戸あたりまで古墳集団が進出しますから、従来は続縄文人が東北北部の内陸部に入りこんで定住しながら行っていた古墳集団との交易が、八戸など東北北部太平洋岸に成立した古墳集団のフロントに続縄文人が夏の間だけ交易に訪れる、そうしたかたちに変わったのではないか。そうだとすれば、これは東北北部に入りこんで定住をしながら行う交易よりも、かなり効率的でスマートな、組織的な交易といえる。６世紀以降の交易の拡大は、このように説明できるのではないか。

こうした交易形態の転換は、実は続縄文人だけでなくオホーツク人にとっても大きな意味をもっていました。

続縄文人が東北北部に南下したのと同時に、サハリンから北海道にオホーツク人が南下してきます。オホーツク人のこのような動向は、続縄文人と同様に古墳社会との交易・鉄製品の入手がかかわっていたと考えています。

かれらは道東北に展開して続縄文人と北海道を二分していましたが、東北北部太平洋沿岸に交易拠点が成立したとみられる６世紀になると、状況は大きく変わります。オホーツク人が道南にまで南下してくるのです。

かれらは奥尻島に拠点を設けて、夏の間そこに定住する。さらに、道南端の松前や下北半島からもオホーツク土器が出ていますので、かれらは奥尻島を拠点に津軽海峡を往来していたらしい。かれらが下北半島を回りこんでどこに向かおうとしていたのかといえば、続縄文人と同じように東北北部太平洋沿岸の交易拠点に行こうとしていた、と考えるのが自然ではないでしょうか。

オホーツク人の集落は沿岸にだけあり、内陸にはありません。かれらは漁民で、内陸に住み着くことはできなかったようです。東北北部の内陸に入りこんで古墳集団と交易をおこなっていた４～５世紀の段階では、オホーツク人がそこに参与するのは困難でした。しかし、東北北部太平洋沿岸に交易拠点が成立した６世紀以降、オホーツク人が参与する条件は整った。沿岸で漁労しながら交易することは可能になったわけです。だからかれらは南下してきたと思うんですね。

しかし、オホーツク人と続縄文人の関係は友好的なものではなかった。古墳集団と続縄文人は中間地帯でお互いに混住しながら交易していましたが、オホーツク人と続縄文人のあいだではこのような混住はおこなわれていませんでした。中間地帯はなかったのです。そのような緊張関係にあったオホーツク人が、石狩低地帯から日本海を南下して東北北部太平洋岸に向かう続縄文人の交易ルートに刺さりこんできた。そのうえオホーツク人は道南端に近い奥尻島に拠点まで設けた。続縄文人にとって、きわめて由々しき事態になったわけです。おそらく、少なからぬトラブルが生じていただろうと思います。

一方、東北北部太平洋岸で続縄文人と交易をおこなっていたであろう古墳集団、かれらはエミシと呼ばれる人びとだったわけですが、この古墳集団にとっても、オホーツク人が交易に介在して続縄文人とトラブルを起こし、交易が滞るのは困る。６世紀以降、北方世界ではそのような状況が続いていたと考えられます。

そうしたなかで７世紀中葉に阿倍比羅夫の遠征がおこなわれた。比羅夫はどこに向かったのか、粛慎とはだれか、なぜ粛慎と戦ったのか、遠征の目的は何か。今申し上げたような北方における民族的世界の状況を踏まえると、このような疑問はすべて明らかになると思うんです。

阿倍比羅夫が向かった渡島は北海道と考えられていますが、そこには渡島蝦夷がいました。かれらは北海道本島に住んでいて、沖合の島にいる粛慎から危害を加えられている。助けてほしいと頼み、比羅夫と粛慎が戦うことになります。当時の北海道で敵対的な関係にあった２つの集団といえば、続縄文人とオホーツク人です。北海道本島側の渡島蝦夷は続縄文人、沖合の島にいた粛慎は、沿岸部や島伝いに展開していたオホーツク人と考えられます。さらに当時、続縄文人とオホーツク人はオホーツク人の南下拠点であった奥尻島をめぐって緊張関係にあったと考えられますから、沖合の島は奥尻島とみてまちがいなさそうです。

では、比羅夫遠征の目的は何か。それは東北北部太平洋岸のエミシ集団を介在せず、王権が続縄文人と日本海ルートで直接交易をおこなうことであり、そのためには続縄文人の往来に障害となっているオホーツク人を奥尻島から撤退させる必要があった、といえるのではないでしょうか。

資料には、４世紀、７世紀、８世紀の北海道における民族的集団の分布図を載せています。７世紀の比羅夫遠征前の状況と、８世紀の遠征後の状況を比べていただきたいのですが、比羅夫の遠征後、オホーツク人が道北に撤退していることがわかると思います。比羅夫遠征の目的がオホーツク人の排除にかかわるものであったということが、この分布図からもうかがわれます。

実はこの比羅夫の遠征が、擦文文化の成立にきわめて大きな影響を及ぼしたのではないか、と私は考えています。ただし、比羅夫の遠征自体が集団移住を伴うものだったとか、遠征それ自体が劇的な文化変容をもたらしたと考えているわけではありません。

王権は、東北北部太平洋岸のエミシ集団が北海道からの流通を独占している状況に、かねてから強いもどかしさを感じていたのではないかと思います。そこで王権は、比羅夫を派遣し、日本海側のルートを開拓しながら、エミシ集団を介在させない続縄文集団との直接交易を画策した。過剰とも思える圧倒的な武力を誇示しながらオホーツク人を排除することで、王権と続縄文人のあいだには一定の関係が構築され、その後は日本海ルートで両者の交易が展開することになったと思います。

ところが、北海道との交易に少なからず依存していた東北北部太平洋岸のエミシ集団にとって、北海道産品の流通が王権に集約されるのは死活問題でした。エミシ集団は、続縄文人が北海道日本海側から太平洋側に回りこんでくる従来のルートではなく、続縄文人の中心地であった石狩低地帯から北海道太平洋岸を経由し、東北北部太平洋岸にやってくるルートを開拓しなければならない、きわめて切羽詰まった状況に追いこまれることになりました。

そこで東北北部太平洋岸のエミシ集団のとった行動が、みずから北海道に進出してそのルー

トを開拓することだった、北海道に入りこんで王権の側に傾いた続縄文人と直接交易をおこなうことだった、と思うわけです。八木先生がさきほど述べておられましたが、７世紀後葉には石狩低地帯の太平洋側から土師器やカマドをもつ竪穴住居といった東北北部の文化が入ってくる。それが時代をおって石狩低地帯の日本海側にも広がります。では、なぜ太平洋岸から広まっていったのでしょうか。それはこれまで述べたところから説明できるのではないでしょうか。

東北北部から北海道に移住があったとして、その目的はいったい何だったのかと考えることがあります。アワやヒエといった雑穀栽培の耕地を求めてわざわざ移住したのか。そうは考えにくい。そうではなく、交易ルートの開拓と続縄文人の取りこみが目的であったとすれば、渡海の理由は納得できる。さらに、渡海の目的が交易にかかわっていたとすれば、たとえば交易にかかわる資源探査のようなことも北海道でやっていた、と考えた方がいいんじゃないかと思います。

ところで、続縄文土器というのは３つの民族的要素をあわせもった土器です。ひとつは縄文や沈線文という在地の伝統、ひとつは刷毛目調整や無文化という本州の土師器の伝統、ひとつは円形刺突文というオホーツク文化の伝統です。続縄文土器は、当時の北方世界の民族的なパワーバランスをみごとに体現している土器なんです。

一方、擦文土器とは、続縄文土器からオホーツク文化の影響を一掃しつつ、かぎりなく本州の土師器化した土器です。なぜオホーツク土器の影響が排除されたのか。それはやはりオホーツク人の道北への撤退、東北北部から北海道への移住という、擦文文化成立にあたっての民族的世界の転換を考えないと理解できません。

その後、擦文時代中ごろの 10 世紀に、太平洋と日本海の交易ルート上の集団が組織化されていきます。中世には、この太平洋沿岸集団が日ノ本、日本海沿岸集団が唐子と日本から呼ばれます。近世には前者が東蝦夷地、後者が西蝦夷地と呼ばれます。このような日本海ルートと太平洋ルートに沿って北海道を二分する地域展開は、７世紀後葉の東北北部からの移住がかかわっていた。そしてその移住の契機には、阿倍比羅夫遠征という王権による北方の民族的世界への介入が大きくかかわっていたのではないか、と申し上げてコメントに代えさせていただきます。ありがとうございました。